

機関番号：12102

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20500534

研究課題名 (和文) アダプテッド・スポーツ教育への関心についての基礎的調査研究

研究課題名 (英文) Fundamental Research of Interest in Adapted Physical Education

研究代表者

澤江 幸則 (SAWAE YUKINORI)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・講師

研究者番号：20364846

研究成果の概要 (和文)：本研究は、体育・スポーツ指導者を目指す学生に対して、アダプテッド・スポーツ教育への関心を高めるための教育方法について検討した。すなわち、自ら行うスポーツ活動への関心を高めることはもちろんのこと、スポーツのもつ多様な価値を高める必要性が示された。また自ら行うスポーツ活動で得た経験等が障害のある人に生かされることの意義に気付かせる必要があると考えられた。これらの教育内容は、より実践的体験のなかで学習することが重要である。

研究成果の概要 (英文)：This study discussed the teaching methods for the aim that students who pursued the P.E. or sport related careers would be interested in the adapted physical education. As a result, the methods constituted of raising the interest in not only the value of active sport but also the diversity of sport values, awakening what sport had signification for people with disabilities, and learning above contents by more practical experiences.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 スポーツ科学

キーワード：障害者スポーツ

1. 研究開始当初の背景

(1) 我が国におけるインクルーシブ教育の現状からみた本研究の意義

平成 19 年度から本格的に稼働した特別支援教育制度の特徴のひとつは、障害の有無に関係なく、児童生徒がともに学び合う場をもち、共同した学習等を行うインクルーシブ教育を促進することである。インクルーシブ教

育は、社会において障害あるなしに関係なく、一人ひとりをユニークな存在として認め合うノーマライゼーション思想の実践的方法論である。こうした流れは、この制度の本格稼働により、学校教育だけに留まらず、地域における支援等においても、現在よりも一層の推進が期待できる。それは、地域における体育・スポーツ指導場面でも同様のことが言える。しかし我が国における体育・スポーツ活動におけるインクルーシブ教育の考え方

にもとづいた実践報告は、長曾我部等の代表的なものがあるものの、まだ少数である。さらに、その実践における方法論について、試行錯誤の段階と言える。

そのような現状のなか、体育・スポーツ指導場面だけでなく、全般的傾向として、適切な配慮のない場面への障害のある児童生徒の放り込み（ダンピング）や、担当する学級や学習グループに障害のある児童生徒がいるにもかかわらず、特別支援学級担任や支援員に丸投げし、自らは関わろうとしない新しい形のダンピング（ネオダンピング）等もみられる。さらに、体育授業では、障害のある児童生徒を見学させ、学習機会を提供しない状況も依然としてみられる。

このような体育・スポーツ活動における様々な問題を解決することは、障害のある児童生徒に対する体育・スポーツを包含するアダプテッド・スポーツ科学分野において、近年の重要課題のひとつと考えている。そして、こうした課題を解決するよう取り組む本研究は、アダプテッド・スポーツにおけるインクルーシブ教育の推進を図り、実際の教育・指導場面に対する助言・援助資料を得る等の意義があると考えられる。

（2）本研究に至るまでの経緯

本研究では、アダプテッド・スポーツにおけるインクルーシブ教育に関連する問題背景に、学校を含めた地域に、障害理解のある体育・スポーツ指導者が少ないことが関係しているのではないかと考えた。特に、地域で指導する体育・スポーツ指導員（または、それをめざす学生）に対して、アダプテッド・スポーツへの関心を高める教育的取り組みが必要ではないかと考えた。

ところで、ここで示した「アダプテッド・スポーツ教育への関心」とは、体育・スポーツ指導等のスポーツ教育に携わる者、及びその養成段階の学生がもつ、障害のある児童生徒の行う体育・スポーツ活動に注意を向ける段階から、個人のもつ社会的資質としての体育・スポーツ活動に注目する段階を含めた、広義の心理的状態である。その「アダプテッド・スポーツ教育への関心」に関する心理的状態は、徳田・水野等が概念化してきた「障害理解」がもとにあり、その理解を促す際の外界の事象にむけられる注意内容である。それと同時に、形成される「障害理解」の発達段階に応じて向けられる関心内容が異なる発達の心理活動である。

さらに、「障害理解」に関する先行研究を中心に、「アダプテッド・スポーツ教育への関心」に関連する要因について調べたところ、ひとつは、組織化された交流体験や障害や障害対応に関する知識等が関連すると考えられた。それらに加えて、これまで受けてきた

指導や支援、教育等によって形成された指導等に関する自己の考え方（例えば、運動活動においては、過去の運動活動に関する被指導経験や、運動活動についての被学習経験による個人がもつ運動活動に対する考え方）等も関連すると考えられた。

2. 研究の目的

以上のことから本研究では、体育・スポーツ指導者及び指導者を目指す学生がもつ「アダプテッド・スポーツ教育への関心」を高める要因を明らかにするとともに、その関連性および心理的メカニズムを明らかにすることを目的とした。すなわち、先行的に行われた関連研究で示された研究方法の検討をもとにして、1)「アダプテッド・スポーツ教育への関心」構造を特定化し、2) 要因間の関連性を明らかにすることとした。その対象は、体育学専攻学生で、大学入学初期段階から経年的にデータを収集する予定である。それに加え、アダプテッド・スポーツ科学への関心が高い学生や実際のアダプテッド・スポーツ指導者等、アダプテッド・スポーツに対して比較的志向性の高い者を対象とした比較研究を行うこととした。

そして教育プログラムへの展開のため、「アダプテッド・スポーツ教育への関心」に関連する要因のうち媒介変数となりうるものについて分析を重ねた。

3. 研究の方法

研究1)「アダプテッド・スポーツ教育への関心」構造の特定化

「アダプテッド・スポーツ教育への関心」構造を特定化することを目的に、関連する先行研究をもとに関連項目を抽出し質問紙調査を作成、体育学を専攻する学生対象に質問紙調査を実施した。調査項目として大きく「障害児運動活動への関心」と「関わり要因」、「知識要因」、「思考要因」などについて尋ねた。

研究2)「アダプテッド・スポーツ教育への関心」構造における要因間の関連性について

1) 基盤的構造についての分析

研究1で明らかにされた要因をもとに質問紙を作成、体育学系教育課程をもつ大学の体育学専攻学生のうち、アダプテッド・スポーツについての授業を受講した学生を対象に質問紙調査を実施した。調査項目として

「アダプテッド・スポーツ活動への関心」と「障害児者にとってのスポーツ活動の意義」、「一般スポーツ活動への関心」などについて尋ねた。

2) 体育専攻学生の特異性についての分析

研究2の1)で確認された要因をもとに質問紙を作成、体育専攻学生と非体育専攻学生もしくは現職者を対象に質問紙調査を実施した。調査項目として「アダプテッド・スポーツ活動への関心」と「障害児者にとってのスポーツ活動の意義」、「一般スポーツ活動への関心」などについて尋ねた。

研究3)「アダプテッド・スポーツ教育への関心」に影響する媒介変数の検討

体育学専攻学生を対象に質問紙調査を実施した。調査項目として、「障害児スポーツ活動への関心」と、大学入学前後の「関わり」の量と「関わり」の質などについて尋ねた。

また1年間にわたり定期的にアダプテッド・スポーツ活動に参加した学生に対して半構成面接を実施した。面接項目として「参加動機」と、活動前後の「アダプテッド・スポーツのイメージ」と「障害観」に関する内容について尋ねた。

加えて、非体育専攻学生を対象に、アダプテッド・スポーツに関連する授業前後の心理についてアンケートを実施した。

4. 研究成果

研究1)「アダプテッド・スポーツ教育への関心」構造の特定化

この研究で「障害児運動活動への関心」と関連する要因として考えられたのは「思考要因」であった。具体的には、障害児の運動活動の関心を高めるには、運動活動の「障害児への適用可能性」と「意義の多面性」を認識化していくことが必要ではないかと考えられた。一方、当初、予想していた体験要因への影響はなく、これについては課題となった。

研究2)「アダプテッド・スポーツ教育への関心」の要因間の関連性について

この研究で、一般的な体育・スポーツへの関心からアダプテッド・スポーツ教育への関心に至る認知構造に2つのルートが存在するのではないかと考えられた。1つは「するスポーツ」への関心から障害のある人の「発達促進」へのスポーツの意義、そしてアダプ

テッド・スポーツの「支援・指導」への関心に影響するルート、本研究では、体験投影パス(Experience-Project-Pass)と命名した。もう1つは、「みる・ささえるなどのスポーツへの間接的関心」から直接「アダプテッド・スポーツ教育」全般への関心に影響するルートである。そのうちの前半のルートは、一般体育・スポーツを専攻とする学生の特性であることが確認された。

また「アダプテッド・スポーツ教育への関心」は、「障害」に関する知識の量と質に関連していることがわかった。特に質においては、障害のある子どもに対する支援や指導など「対応」に関連する知識を有する学生の方に関心の高い傾向があった。

体育専攻学生は、非体育専攻学生に比べて、スポーツ活動全般の関心が高いもののアダプテッド・スポーツ活動への関心や意義には差がなかった。そのなかアダプテッド・スポーツ活動への影響における自ら行うスポーツ活動への関心は体育専攻学生の特性ではないかと考えられた。また「障害」側面からの「アダプテッド・スポーツ活動」への関心を高めるためのルートが存在するのではないかと考えられた

研究3)「アダプテッド・スポーツ教育への関心」に影響する媒介変数の検討

1) 授業内容

体育専攻学生の多くは、授業を通して、障害児身体活動に対する直観的感覚に委ねられた関心などから教養的関心へ変容していく傾向があった。一方、関心の程度を下げた学生が含まれていたが、それは障害児身体活動に関する学習内容を受動的なものから能動的に捉えようとした結果ではないかと考えられた。

本研究の対象授業を通して、体育専攻学生は、既存の「障害」の特に「対応」に関する知識を「障害児身体活動への関心」に結びつけ、その結果、広く教養的な関心段階に至ったのではないかと考えられた。

一方で、専門的内容への関心をもつ学生にとっては、本研究の対象授業は満足のない内容であった可能性があった。また教養的関心とは言え、知識的内容にとどまらず、より実践的内容を含めた関心へと高める必要があると考えられた。

2) 交流体験

交流体験は「障害のある子どもの実務的側面の関心には効果的である」と考えられた。積極的にポジティブに取り組める交流体験が関心を高めるために重要であることが統計的に証明された。

すなわち、体験交流は多いだけでは関心の

促進につながらない、むしろネガティブな態度での交流体験は、関心を低減させる要因となりうると考えられ、「交流体験は量より質の問題である」ことを実証した。

総合考察～アダプテッド・スポーツ教育への関心を高めるための教育的方法について

一連の本研究の結果から、体育専攻学生のアダプテッド・スポーツ活動への関心を高めるための教育内容としては、自ら行うスポーツ活動である「するスポーツ」への関心を高めることはもちろんのこと、そこだけに留まらず、スポーツのもつ多様な価値を高める必要性が示された。そのなか、自ら行うスポーツ活動で得た経験等が、障害のある人に生かされることに意義を見いだせるための教育が必要ではないかと考えられた。これらの教育内容は、講義だけに限らず演習や実習を通して、より実践的体験のなかで学習することが重要である。加えて、非体育専攻学生においては、「するスポーツ」の関心を高めることで、アダプテッド・スポーツ活動への関心をより一層高められるのではないかと考えた。すなわち、大学体育等において、肯定的学習体験を得るための体育授業の一層の充実をはかる必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- 1) 澤江幸則・齊藤まゆみ・柄田毅・井田智之・村上祐介・牧佑耕・五町歩美・中原陽子: 体育専攻学生のアダプテッド・スポーツ活動への関心を高めるための教育内容について～非体育専攻学生との比較を通して～. 障害者スポーツ科学, 10巻. 2011年6月発行予定(印刷中). (査読有)
- 2) 澤江幸則・齊藤まゆみ: 「障害のある子どものための身体活動」への関心についての研究: 障害に関する知識との関連に着目して. 筑波大学体育科学系紀要, 33, 87～98, 2010. (査読有)
- 3) 柄田毅・安藤美樹・梶原隆之・行實志都子・綿祐二・四方浩一・古田常人・澤江幸則: 特別支援に関連する多領域専門性の教育・研修に関する研究. 文京学院大学総合研究所紀要, 11, 205～220, 2010. (査読無)
- 4) 澤江幸則, 齊藤まゆみ: 障害のある子どもの運動活動への関心に関する基礎的調査研究. 筑波大学体育科学系紀要, 31巻, 131～140, 2008. (査読有)

[学会発表] (計6件)

- 1) 澤江幸則・柄田毅: 「障害のある子どものための身体活動」への関心についての研究V～現職者と学生との比較を通して～. 日本発達心理学会第21回大会. 2010.3.27, 神戸国際会議場(兵庫県)
- 2) 澤江幸則: 「障害のある子どものためのスポーツ活動」への関心についての研究IV～「障害」に関する知識体系に着目して～. 日本体育学会第60回大会. 2009.8.26, 広島大学(広島県).
- 3) 澤江幸則・柄田毅: 「障害のある子どものための身体活動」への関心についての研究III～「障害イメージ」との関連性に着目して～. 日本発達心理学会第20回大会. 2009.3.25, 日本女子大学(東京都).
- 4) 澤江幸則: 「障害のある子どものためのスポーツ活動」への関心についての研究II～障害児者との体験交流との関連に着目して～. 日本体育学会第59回大会, 2008.9.11, 早稲田大学(東京都).
- 5) Sawae, Y.: The Interest in Adapted Physical Activities for Children with Disabilities by Students Majoring in General Physical Education. Proceedings: The 10th International ASAPE Symposium. 2008.8.9, Korea National Sport University(韓国).
- 6) 澤江幸則: 障害のある子どもの運動活動への関心を高めるための研究I～関わり経験と知識特性、思考特性に着目して～. 日本発達心理学会第19回大会. 2008.3.20, 大阪国際会議場(大阪府).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

澤江 幸則 (SAWAE YUKINORI)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・講師
研究者番号: 20364846

(2) 研究分担者

齊藤 まゆみ (SAITO MAYUMI)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・准教授
研究者番号: 00223339

柄田 毅 (TSUKADA TAKESHI)
文京学院大学・人間学部・准教授
研究者番号: 10383308